

平成二十二年度「花のまわりみち」

川柳入選句

三浦 宏選

天地人・秀逸

「天位」

見おさめと嫁ぐ娘と花ふぶき

西 照子

(評) 離れ行く娘を伴った「花のまわりみち」の感慨が上五にあふれ、花ふぶきの風情がしんみりとさせてくれる。一言も、別離の寂しさに触れた表現のないのが、句を深くしている。

「地位」

桜見て育てた人を思いやる

龍 美代子

(評) 「花のまわりみち」の各所から上がる感嘆の声。ここまでにお世話をされた関係各位への感謝の念が胸を打つ。下五に作者のやさしさを見せ、心温まる句に仕上がっている。

「人位」

五十九種尋ね歩いて花疲れ

谷口 敬誠

(評) 心身ともに少し疲れたが、中七に、名称のいわれにうなずきながらのひとときであることがうかがわれる。心地よい満足感の方が疲れを上回り、来年への期待さえ抱かせてくれる。

「秀逸」(五句)

去年こぞの選者も見てござろうか花あかり

大野 順子

(評) よみじへと旅立たれた、定本広文前選者の柔和なお顔を思い出される投稿者も多いと思われる。合掌。

花を愛でかたわらに聴く銭の音

中野 賢二

(評) 硬貨の音を下五に据え、造幣局広島支局であることをうなずかせてくれる。「桜の通り抜け」の大阪では聞くことのできない音を取り上げていただいた点を多としたい。

二巡目も紅華で同じ人に会う

河村 幸子

(評) 華やかな「紅華」が今年の花とか。もう一度みておこう、と足を運んだのは、作者だけではなかった。「また、お会いしました」と、あいさつをしているお二人が目に見える。

花守にシャッターのみポーズとる

中植 紀子

(評) 全ての樹と会話できる花守さんなら、アングルも安心して任せておけるといふもの。思い出の記念写真の一枚がアルバムを飾る。

まわりみち毎年一つ名を覚え

楠山 東石子

(評) 今年で二十回目の「花まわりみち」。59品種をおぼえきれるかどうか。来年も挑戦して、足を運ぶつもりだという気持ち伝わってくる。

佳作

(十八句)

八重桜咲いて選者の死を悼む

吉川 徳子

桜散る悔いなど残さないように

弘兼 秀子

ときめいて八重桜手に背すじ伸び

浜松 祐子

たんぼぼのひねもす楊貴妃と語り

森田 敬子

私にも紅華の時代あつたらう

田中 文香

桜にも戦中散つた悲史がある

正木 巧

痛風の痛み忘れた花吹雪

中島 健治

今年の花紅華は二度も仰ぎ見る

川平 厚

楊貴妃に迷わず歩く花の道

中桐 綾子

手にとって遊んでみたい大手毬

萩原 律子

さくら道肩ふれ合っておじぎする

川中 和子

桜道行き交う人も花と化す

村上 侃

艶やかな桜とわたし見比べる

口石 由実子

琴の音に花びら応え咲き誇る

高橋 清隆(清竜)

咲き誇れコインの街のさくらたち

沖本 京子

花の毬揺れば青い空も揺れ

酒井 厚(水鳥)

思川なんて素敵な響きでしょう

二井田 理奈(りんご)

さくらの木え顔いっばいえ顔の木

こしかわともや(9歳)

選者吟

三浦宏

誇らしげさくら新入児を迎え